

摂大祭出展作品

化かし、 化かされ

著者..陽傾 ひ た む き
斗黒 と ぐ ろ

所要時間..十分ほど

その日はよく晴れていて、夏の終わりに差し掛かった空は、雲をいくつか蓄えていた。

あるアパートの一室に、その老人は住んでいた。築30年は優に超えていそうな、古ぼけた建物だ。かつては白かったであろう漆喰しっくいの壁は、黒ずんでいてひび割れも所々に現れていた。金属製の手すりには赤サビがこびりついていて、積極的には使う気になれない。目的の部屋の扉も、金属製だ。こちらはコーティングが施されているだけ幾分かマシだったが、それでも、虫に食われたようにコーティングが剥がれていて褐色が覗いていた。

扉横の古い方式のピンポンを押すと、一刻して玄関口が開いた。腰の曲がった小柄なその老人は、手を擦って我々を迎える。彼はまるで小豆洗あずきあらいのような風体で、何をするにも頭を頷くように上下に動かしている。

「稲荷テレビの大脇おおわきと申します。本日はよろしく願います。」

私はそう言って、名刺を差し出す。ああ、ああと頷きながら、老人がそれを両手で受ける。

「よおこそお越し下さいました。ささ、どうぞお上がりくださいな。」

私が今日ここへ来たのは、番組に使う取材のためだ。私が担当している番組『オカルト調査部』は、その名の通り、視聴者からの便りを元に、超常現象を調査する番組である。今日は、この老人が遭遇そうぐうしたという、不思議な体験に関する調査のために、彼の自宅へとやってきたのだ。

カメラマンを先に入って撮影するよう促した。老人はカメラマンに先行しようとせかsekせかと室内へと入っていった。続いて私、その後おんきようがかりに音響係が続く。

「お邪魔します」

廊下を抜け、リビングへ着いた。生活感があって年季を感じさせるものの、よく整頓された部屋だった。使い古されたヤカン、シンクへ一旦退けただけに見える食器、ほとんど満杯のゴミ袋。これまた使い古された机の椅子を引いて、老人はしわくちやの笑顔をこちらへ向ける。

「どうぞ、どうぞ。お掛けになってください。」

「ありがとうございます。それでは失礼して。」

私は勧められた椅子に座る。部屋の中は少し薄暗い。それもそのはず、カーテンが下されているようだった。

「お茶を淹れましょう。少しお待ちを」

そういつて台所へ向かおうとした老人を、私はあわてて呼び止めた。

「いえ！いえ、お構いなく。お話を伺って、すぐ帰りますので」

「そうですかい？」

老人は残念そうな顔を浮かべ、私の向かいに座る。彼は汗をハンカチで拭い、すぐに懐へしまった。

「すみませんね、エヤコンが故障こしょうしてしまったものでねえ。」

「いいいえ、お気になさらず。」

私は目配せして、カメラマンに取材を始める合図を送った。

「それでは、そろそろ始めましょうか。よろしいですか？」

「どうぞ、どうぞ。」

老人は不気味なほど変わらない笑顔で答える。

「先日、奇妙な体験をしたのですが、具体的にどのようなものでしたか？」

「ええ。――あれは先月の晩のことでした。静かな夜でして、よく寝てたんですわ。そうしていると、いきなり、ブーン、ブーンと、蜂が飛ぶような音がしたんです。

あまりに煩うるさいものですから、飛び起きて周りを見回したんですな。蜂か、あぶか分かりませんが、もう我慢なりませんでした。

しかし、何もいない。明かりを付けてみても、影すら見えなかったんです。そこで気付きましたわ。音は部屋からでなく、外から聞こえてきてたんです。

音はだあんだと大きくなっていったって、ブルルン、ブルルンと……それがエンジンの音だと気付いたんですな。嫌な予感がして、外を見ました。

暗くてよく見えないけれど、鳥の影みたいなのが空を飛んでるんです。それから、鳥が、何かを落としたんですよ。ポロポローっと、種蒔きみたいに、黒い粒を。黒い粒が地面に着いたとき、地面が揺れました。赤い光が空を照らして、まるで夜が明けたようでした。

鳥は粒を落しながら、こっちに近づいてくるんですわ。赤い光も、どおん、どおんと爆発する音も近づいてくるんです。恐ろしくなって、布団を被って丸まってました。もう最後には、爆発の音が雷様のような、とんでもない音になっておりました。

ふと、音がいきなり止んだんです。なーんにもなかったように、ぴたりと。外を見ると、やっぱり何もなかったように、元通りになっておりました。

ただ、私が呆然ぼうぜんと外を見ていると不意に、クツクツクツ、と笑い声が聞こえてきたんです。幼子の、イタズラっぽくヒソヒソとした笑い声でありました。

……あれから、一度も同じことは起こっておりません」

話は終わったようで、老人はふっと息をつく。私は話の途中でメモを取り出し、内容を記録しつつ聞いていた。話終わったことを察知して、次に質問を切り出す。

「なるほど……もし良ければ、いくつかご質問をしてもよろしいですか？」

「どうぞ、どうぞ。」

「その出来事のあと、何か変わったことはありませんでしたか？」

「特にはありませんなあ」

「あなたは、このことを他の人へ話しましたか？」

「いええ。話しても、信じてはもらえないと思ひましてね」

そこで私は、違和感を覚えた。その理由を看破するために、より切り込む。

「そうですか。……ところで、つかぬことをお聞きしますが、ご近所の方とはよく話されますか？」

「どうして、そんなことを聞くんです？」

老人は不思議そうな顔を浮かべた。当然と言えば当然だが、私は、相応の理由を持ち合わせている。

「実はですね。事前に隣人の方にお話を伺ったところ……」

「この部屋は、数年前から空き部屋だと聞きました」

そう、この部屋には、本来、誰も住んではないはずだった。

「はあ、そうなんですネエ」

どこか他人事のように老人は相槌あいづちを打つ。私は、さらに追及した。

「入居者記録も見ましたが、この部屋はまだ空いているとのことですが。」

「そうかあ、そうですかあ」

老人はなおも笑顔を崩さず、赤べこのように頷き続ける。それが却って不気味だった。

「しかし、この部屋はまるで、何年もここにずっと住まわれているような様子です。……

ずばり聞きますが。あなたは、何者ですか？」

老人は黙って、笑顔をこちらに向けている。眉ひとつ動かさず。汗ひとつかかず。時が止まったように、老人はただそこに静止していた。

長い沈黙。我々は彼の出方を窺うが、全くと言っていいほど何かをする素振りを見せない。むしろ、こちらの方が張り詰めた空気に縛り付けられているようにさえ感じられた。

かすかに、外から何かの音が聞こえてきた。ぶるる、るる……。恐らくバイクが走ってくる音だろう。

「ああ、ああ。この音、この音です」

老人が唐突に、さも嬉しそうに言った。

「なんですって？」私は思わず聞き返した。

「あの夜も、こんな感じの音がしたんですわ。ブルルン、ブルルンと……」

バイクの走る音が、より大きくなる。より近くなってくる。それに輪唱するように、老人はエンジンのオノマトペを繰り返す。

「ブルルン、ブルルン……ブルルン、ブルルン……」

そろそろ過ぎ去ってもいいはずのバイクの音は、なおも大きくなり続けていた。しかも、一つだけでなく、幾重にも音が重なって、耳をつんざくようであった。そこで私は、ようやくその音がバイクではないことを悟ったのだ。

私は椅子から立ち上がり、カーテンをバツと開いた。今は昼のはずだが、夕焼けのように空が赤黒く染まっている。街並みが陽炎に揺らいで、まるで焼け溶けているようだ。その不気味な光景に、私は息を飲んだ。

黒い影のようなものが、隊列を組んで空を飛んで来るのが見えた。鳥のサイズではない。飛行機くらいの、大きな影だった。それが、けたたましいエンジン音を発していたのだ。

影は、老人の話をなぞるように、黒い何かをぼとぼと落とし始める。私は嫌な予感が脳裏をよぎって、まさか、と口をついた。

黒いそれが地面に着弾する。それと同時に、激しい閃光と轟音が炸裂した。その正体が何なのか、私には想像が付いていたが、口にするのは憚はばかられた。

……いや、信じたくはなかったのかもしれない。なぜなら、その爆撃機の隊列は、こちらへと向かってきていたのだから。

「く……本部に連絡を！」私はスマホを取り出し、外部に連絡を取ろうとする。が、一足先にそれを試みていた音響が声を上げる。

「ダメです、通じません！」

「どおーん、どおーん、どおーん、どおーん、どおーん、どおーん、どおーん、どおーん、どおーん、どおーん」

老人は壊れたラジオのように、同じ言葉を繰り返している。もはや意思の疎通は不可能であろうことは明らかであった。

カメラマンが急いで玄関へと向かい、ドアノブに手をかける。しかし、いくら回しても、引いても、押してもびくともしないようだった。まるで壁だ。

残る出口は、ベランダしかなかった。私は急いで窓の取手に手をかける。見ると、爆撃機は20キロ圏内へと近づいてきていた。爆撃機の飛ぶ速度から考えると、もはや一刻の猶予ゆうよもないだろう。思い切り取手を引くが、まるで動かない。ガチャガチャと力いっぱい動かそうとしても、何の意味もなかった。

もう手段は選んでいられなかった。窓を割るしかない。椅子を引っ掴み、思い切りぶん投げた。……だが、その窓は割れるどころか無傷のまま椅子を跳ね返してしまったのだ。ありえない、強化ガラスだとも言うのか。そんな悪態についても、何ひとつ状況はよくならない。

思いつく限りの、外部へと通じるものを調べる。郵便受け、キッチンの排気口までも。だが、一つとして動かすことができなかった。

爆撃機はもう目と鼻の先まで来ていた。遠くからでも凄まじかった音と光は、耐え難いまでのものになっていた。爆発の振動が、地面を伝ってくる。

もはやこれまで。私は死を覚悟した。

光が、熱が、衝撃が——私の身体を突き抜けてゆく——。

ふと、目が覚めた。そこは老人の部屋のようだが、まるで数年の時間が流れたかのように、荒れた様子であった。我々三人とも、ここで眠っていたようだ。起きあがろうとしたとき、喉に溜まった何某かを、本能的に咳として吐き出した。げほげほと咳き込むたびに、白っぽいほこりが宙に舞っていく。喉の異物感の正体は、おそらくこれだろう。肺炎にならなければいいが。

少し遅れて、二人が目を覚ました。彼らもキョロキョロと周りを見渡していて、状況が掴めていないようだった。しかし私には、こういった状況に一つ心当たりがある。

「どうやら我々は――化かされたらしい」

カメラマンがキョトンとした顔を浮かべてこちらを見る。

「化かされた……というと、もしかして、アレすかね？」

「化け狐の仕業だろう」

化け狐。古来より、人に幻を見せてイタズラをする妖怪だ。我々の慌てふためく様子を見て、さぞ楽しんでいたことだろう。そして、私の推測を確かなものにするかのように、どこからか、笑い声が聞こえてきた。クッククク……という、子供のような甲高い笑いだ。それを聞いて、音響が溜め息を一つついた。

「なんて人騒がせな……。まあ、命があるだけマシですけど」「違いねえっす」

実際、その通りだ。この規模の怪異に遭遇して、死ぬのは珍しいことではない。とはいえ、不快感は拭えないが。

「これからどうします？とりあえず上に報告しますが。」

「頼んだよ。それと、『超常捕獲課』にもこの件を伝えてくれ。」

「捕獲課に？どうしてですか？」

「現代となつては、化け狐は珍しい妖怪だ。保護すべき対象なのさ。捕獲課なら、喜んであいつを捕まえるだろう。」

なるほど、と音響はスマホを取り出す。我々の表向きの顔はテレビクルーだが、実際の身分は稲荷警察署、都市伝説部、超常捜査第二課の警官だ。我々の本当の目的は、人々の脅威となりうる怪異を調査し、必要に応じて措置を施すことだ。担当している番組も実際に放送しているが、あくまで都市伝説調査のためのオトリとして運用されているにすぎない。

「さ、どちらが本当に化かされたのか、あの狐に分からせてやるとしよう。現場検証を始めるぞ。」

「忙しくなりそうっすね。」

超常調査第二課としての長い戦いが始まる。

あとがき

ここまでお読みいただきありがとうございました。陽傾斗黒です。これが初めての出版ということ、若干緊張をしております。どうぞ、温かい目で見ていただければと思います。もし面白いと感じて頂けましたら、作者冥利に尽きます。

さて、今回の作品ですが、当初の予定では写真を用いた短編作品を作るつもりでした。しかし、時間的な制約や、プロットが固まっていなかったことから、今年での公開は見送りました。次に、いくつかのショートショートと共に出すことにしましたが、これも断念。アイデアはあったものの、やはりプロットが組めていなかったためです。最終的に、しっかりプロットを組んでいた短編を一つだけ出すことに決めました。何かの機会があれば、これ以外の作品も公開するかもしれません。お楽しみに！

構想自体は二、三年前に完成していたものの、完成までには漕ぎ着けていませんでした。それを、この機会に完成させた形です。3,000~4,000文字くらいになるかなと思っていましたが、5,000文字と、それより長い作品になってしまいました。しかし、読み応えのあるものになったんじゃないかと、自分に言い聞かせております。

せっかくですの——蛇足かもしれませんが——作品の解説をしようと思います。この作品のテーマは、タイトルの通り「化かすこと」です。化け狐の老人の元に、テレビクルーに扮した主人公が現れ、怪異に巻き込まれていく。お互いがお互いを騙していたという、ちょっとしたどんでん返しを盛り込みました。全体像を把握した上でもう一度読み返してみると、それぞれの行動が、こういった意図で動いていたものだったのかが見えてきて面白いかもしれません。

化け狐に関して語りますと、イメージでは数百年生きてきた古参の妖怪というものでした。何年経っても変わらず、人を化かしているようですが。そうしている理由は、人の驚く姿を見るのが好きだから。悪趣味ですね。そして、驚かすためには、人に『こわいもの』を見せなければなりません。そこでこの化け狐は、その一生で最も恐ろしかった体験を見せることにしたのです。数百年生きた狐ですから、無論、戦時も体験しています。黒い鳥と爆弾は、戦時の空襲を表していたのです。化け狐といえば、山の中で遭遇するようなイメージがありますが、この狐は人に紛れて暮らす珍しいタイプであったようですね。

主人公達についても話していきましょう。作中では彼・彼女らの容姿について描写がありませんが、これは意図的なものです。表現する必要がないと判断しました。よって、彼・彼女らがどのような姿かというのは想像にお任せします。

彼らの大まか人柄としては、インタビュアー（大脇）はベテラン仕事人、カメラマンは若輩者、音響は真面目さんといったイメージです。

その正体は警官だったというのですが、立ち位置的には刑事になるのでしょうか。公的機関ということで、公に怪異の存在が認められている社会であるとも言えそうです。しかも、命の危機に瀕することもある、なかなかキケンなお仕事のようです。そのあたりは説明を省いているため、これもやはり、皆さんのご想像にお任せします。何とも謎が多い人たちですね。

これらの設定は、前から構想していたものもあれば、最近追加したものもあります。ただ、モチーフは変わらず『化かし合い』でした。怪異と人、お互いが敗れまいとする姿こそ、この作品のキモであると言えるでしょう。

といったところで、長くなりましたが、作品の解説は終わりです。作品内で説明したことは最小限なので、全体像が上手く掴めなかった方もいらっしやると思います。しかしそれは、私の文章力不足によるものが多いでしょう。もっと表現が上手になりたいものです。しかし、雰囲気だけでも楽しんでいただけたらなと思います。

改めまして、ここまでお読みいただきありがとうございました。また機会があれば、他の作品も公開するかもしれません。その時は、読んでいただけると嬉しいです！陽傾斗黒でした。またお会いしましょう！